



さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ



未来に伸ばせ 若者の枝を!!

群馬県立農林大学校



高崎市箕郷町に集い「農」に取り組む200人の若者たち



快晴に恵まれた初秋の榛名山麓は空気が清々しい。太陽がまぶしい。自然の息づかいが感じられる。ここは高崎市箕郷町西明屋1005番地。高崎市の中心街から榛名連山の中心に向かってどんどん進み標高306メートルまで登ったところ。振り返ると関東平野の末端にある高崎、前橋の街が見渡せる。ここに全国に42カ所ある道府県立の農業専修学校のうちのひとつ、群馬県立農林大学校がある。高校を卒業して将来、農業に従事しようと考えている若者が集う。

取材班は倉林、下田、長谷川の3人。校長室に案内されて校長先生から学校の概要についてお聞きした。それから午前中は講義参観、午後は実習見学をさせていただいた。

創立91年目

かつては農民道場、農業経営大学校と呼ばれ県内農業従事者の研修の場であった当所に1983年（昭和58年）に農林大が開校。創立当初から数えると卒業生は1万人を超える。卒業生は農業経営の分野ではもちろんのこと、群馬県職員や農協などの農業関係の事業所や企業で活躍している。2005年（平成17年）には専修学校となり、大学への編入や学生支援機構からの支援も可能になった。2年制で1学年の定員は100名。2学科

に野菜、花き・果樹、酪農肉牛、農業、森林・環境の5コースがある。卒業後、さらに農業の研修を積む者に農林部高度専門コース（修業年限1年）がある。

〔募集要項〕（1）農林部：修業年限2年

学科	コース	定員	受験資格
農業経営学科	野菜	15	高等学校卒業（見込み）者、大検・高卒認定試験合格者
	花き・果樹	10	
	酪農肉牛	15	
農林業ビジネス学科	農業	30	高等学校卒業（見込み）者、大検・高卒認定試験合格者
	森林・環境	20	

(2) 農林部社会人コース：修業年限1年

学科・コース	専攻	定員
農業経営学科	野菜	5
社会人コース	花き・果樹	5

(3) 農林部高度専門コース：修業年限1年…略

1年生は全寮制

最初の1年間は全員が学生寮に入って生活する。生まれてからずっと家族のもとで生活してきて、ここで初めて親元を離れ、他人と寝食を共にする学生が圧倒的に多い。これが入学のための必須条件となるとためらう学生も少なくない。しかし校長先生は言います。

「24時間一緒にいなければならないがその体験から得るものは大きい。全国の農業大学の校長も維持すべき制度だと口をそろえて言いま

す。卒業生の多くが、寮生活を懐かしんでいます」と。かなり力が入っていた。オープンキャンパスでもしっかりと見学してもらう。男子は冴羽（さえば）寮、女子は麗心寮。寮は遠方から通う学生にとってはありがたい施設だ。2年生になってからもここで生活する学生もいるとのこと。現在男女合計28名の2年生が寮生活を継続している。



県民から委託を受けている

農林大学校のメリットのひとつに経費の安さがある。寮費、食費込みで2年間で71万円～81万円は安い。今春、前橋市に民間の農業系専門学校が開校したが2年間の経費は3倍を超える。校長先生は「年間予算は学生の農業生産活動による収益も充てられるが大半は税金から。農業後継者を育てるために県民から委託を受けていることを学生に伝えている」と言う。

実践重視

1年時から午前が講義、午後実習。先進農家での体験学習や専門機関見学も多く、実習の占める割合が多い。座学で学んだことを体で体験して初めて農業技術の全体像が身に付く。私たちが取材した日も、2年生による先進酪農家体験の報告会が行われていた。

女子学生が増えた

学内に女子学生の姿が多い。近年、特に酪農肉牛コースに女子が増えたとのこと。県内農業高校でも女子生徒が増加していることが農林大学校進学者の女子学生増につながっているようだ。現在全学生の約30%にあたる49名の女子が在籍するが、講義やコースによって女子の割合は半数に及ぶこともある。

農林大学校では牛が出産した時に最初に仔牛を見つけた学生に名前を付ける権利が与えられるそうだ。そこで学生は競って早朝登校する。そこにも女子の姿が多い。ボーイフレンドの名前を付けることもあるという。



休憩時トランプに興じる学生たち

資格取得が未来を拓く

指導の重点として資格取得があるそうだ。農業教育は実践教育。さまざまな技術を身につけることが成果に結びつく。校内に大型トラクターの運転免許を取ることができるコースがある。専用の圃場もある。警察官が出張して試験を実施する。花き・果樹、フラワー装飾技能士、毒物劇物、樹木医補に関する資格も取得できる。これらはあとあと役に立つ。就職にも有利だ。

卒業後の進路は

農業高校の卒業生が多く、農林業の後継者を目指す学生も少なくないが、JAや農業系の会社に就職する者、公務員を目指す者などもある。実家が非農家というケースも珍しくないから彼らは当然、就職先を探さなければならない。2年生は今まさに就職シーズン。すでに就職先を決めた学生もいるが、結果待ち、これから受験という学生もいる。

群馬県職員や国家公務員は高倍率。特に国家公務員Ⅲ種採用は、民主党政権が国家公務員削減を政策のひとつにうたって枠を狭めたから狭き門だ。林業でここを目指す学生にとって状況は厳しい。

最近5年間では自営が3分の1、公務員、農林業団体、民間企業への就職が5割強。



校舎から榛名連山をのぞむ

学生の気質

校長先生が感心して言った。「しっかりした若者が多い。父母は公務員や会社勤務だが、祖父母の代には農業をやっていた。そのときに子どもだった学生達が今、自分で農業をやってみたいと決意する」と。また、「さまざまな家庭事情の中で育った若者が、収入の多少にこだわらず、生き甲斐ややりがいを求めて農業を目指している。今の若者はすてたものではない」と。校長先生の顔には学生に対する信頼感が満ちていた。

講義参観

本校舎2階、3階が講義室。午前中に90分授業が2コマ。森林・環境コース1年のフォレストセラピーの講義は教室に森の香りが

漂っている。森林浴が科学的にも人の心や体に良い効果をもたらすことが説明されていた。香りの正体はテルペンと呼ばれる物質。バラや柑橘類のような芳香を持ち、香水などにも多用されるそうだ。

花き・果樹コース2年生はブドウについての勉強。黒板に書かれるブドウの種類や、国別、県別の生産量を学生達は真剣に書き写す。



フォレストセラピーの講義

学生食堂

12時、講義室から飛び出した学生達が本館を出て一斉に食堂に移動する。私達も招待された。今日のメニューはカレーだ。学生達の列に混じって並び、白飯を自分で皿によそる。カレーは炊事係の職員がよそってくれる。お茶、水は給水器から、サラダは棚からいただく。

広い食堂も学生と職員であふれている。食べながらのおしゃべりが最高のご馳走だ。私たちはここで女子学生と同席して寮の見学を申し込んだ。



麗心寮は4人部屋

男子寮よりは女子寮の方が整理されているだろうという理由で見学を申し入れた。突然

の訪問だったが、予想通り、とてもきれいに整頓されている。勉強机が4つ、ベッドが4台。ただし、女の子らしく飾り立てているという雰囲気ではない。むしろさっぱりとしている。ベッドも質素なもの。洗濯機が設置された部屋もあり恵まれている。浴室は別棟。大浴場も交流の場。毎晩、女子学生が会話する大きな声が男子寮まで響いてくるとは男子学生の証言。

シイタケ栽培

昼食後は敷地内の施設や実習風景を見学。本館北側の林はきのこ栽培場。ホダ木が並んでいる。残念ながら、前日に収穫して出荷したばかり。取り残された椎茸が木漏れ陽を浴びていた。室内でのポット栽培も行われているが、自然の中で育つ姿に有難味を感じた。



温室

温室内では、トマト、キュウリなどの野菜や高級果実のマスクメロン、バラ、シクラメンなどの花き栽培されている。バラ、キュウリ、トマトは出荷直後や収穫時期終了。マスクメロンとシクラメンはこれからというところ。バラの温室では摘み残された蕾が数個、私たちを迎えてくれた。白、赤、ピンク、黄。



果樹園見学



校地の南端に果樹園が広がる。この時期は収穫の最盛期。この日、花き・果樹コースの2年生が出荷作業に取り組んでいた。指導教官は午前中にブドウの講義をしていた渡辺先生。学生3人と梨の収穫中。ちょうど大人の背丈ほどの高さで棚

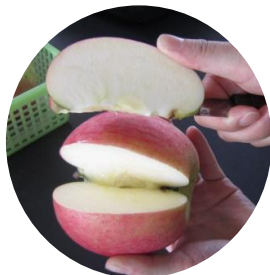
に枝を張り巡らせた梨の木には大きな実が収穫を待っている。豊水の時期が終わり、今は二十世紀。西洋梨も間もなく収穫時期を迎えるようだ。学生たちは丁寧にハサミで実を切り取り、肩に下げた収穫袋に納める。袋が満たされるとコンテナに移動。コンテナを収穫車に載せてリンゴ園に移動。引き続きリンゴの収穫作業を行う。この日の収穫は群馬で生まれた品種、「陽光」。一本の木に200個ほどの実がつくそう。秋の陽を浴びて真っ赤に色づいたリンゴが学生たちの手で次々と摘まれていく。

学生たちにそれぞれの進路を聞いてみた。K君は野菜農家の出身。若いうちはいろいろな経験を積みたいので鶏肉業の会社に就職することを決めたと言う。Y君の父親はブドウ園を営む。Y君は学んだ知識と技術を生かして父といっしょにブドウを育てると言う。Tさんは非農家の出身。進路は未定とのこと。「でも、農林大での生活は楽しい」と微笑んだ。



至福の時

渡辺先生の勧めに甘んじて収穫した果物を試食させてもらった。二十世紀のみずみずしさは言葉では伝えられないほどだった。まるでジュースを食べているよう。陽光も新鮮さにおいては、店のものとは比較にならない。巨峰の濃厚な甘さにも驚かされた。至福の時



を過ごしながら生産者のたゆまぬ努力の重みを身体の真ん中あたりでずっしりと感じた。ごちそうさまでした。

牛舎の仕事は重労働



見学の最後は酪農肉牛コース1年の実習。牛舎で飼育されている30頭ほどのホルスタインの世話する仕事だ。この日の午後は先進酪農家体験の報告会があるために、実習に参加したのは選ばれた3人の

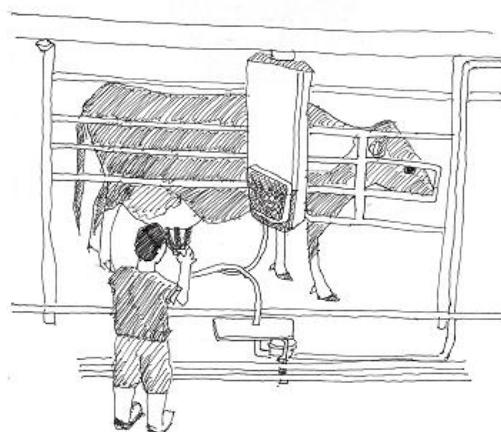
男子学生だけ。それぞれが、牛舎の清掃、餌やり、搾乳の仕事に黙々と取り組んでいた。60cm四方に固められた飼料の攪拌、牛舎の糞の掻きとり、搾乳などには大幅に機械が導入されているが、人力に負うところもかなり多い。N君は舞い立つほこりを気にもせず餌やり作業に精を出していた。

作業に追われる学生達を尻目に私たち取材班はケージの中の愛くるしい目をした仔牛にさかんにカメラを向けていた。なんだか申し訳ない気分だった。しかしまた、生き物を世話し、ともに成長する実感を味わっているのも彼らなのかもしれない。



自動化された搾乳作業

「牛の乳しぼり」という言葉は私たちの記憶の中にある光景を呼ぶも時のものだ。牛の乳首を両手で握り、5本の指をたくみに操ると床に置かれたバケツの中に乳が突き刺さるようにしぼりだされる。しかしこの日に見たのは「搾乳」と二字の熟語で表わすのがふさわしいものだった。3つ連なった囲いに狭い通路を通って牛が入る。学生が乳房を消毒し「搾乳機」を取り付けると機械が作動し始める。特に音がするわけではない。牛はおとなしくしている。やがて機械が妙な動きをすると自動的に外れる。しぼり終えたことを機械が感知して終了するという。柵の扉が開いて牛が出ていく。「ああ、せいせいした」とは言わないが、そんな様子でひきあげていくのだ。これが順番に、実に整然と行われ、この日は10頭ほどの搾乳が行われた。



榛の木祭

「はんのきさい」が近い。農林大の学園祭で、学生の研究成果の発表や農林産物販売、各コースが工夫を凝らした模擬店、餅つき、搾乳体験などのイベントが行われる。今年のスローガンは「未来に伸ばせ僕らの枝を」。期日は11月12日（土）と13日（日）10時から。初日は14時30分まで、二日目は14時まで。ハノキは榛名山一带に見られる落葉広葉樹。実は小さなマツボックリに似ている。



社会人や子どもたちにも開放

校門に木製の校名板が貼られてあり「ぐんま農業実践学校」とある。これは、これから県内で農業を始めようと考えている県民を対象に、農業の基礎的な知識や技術を習得してもらうために開校されたもの。定員は合計で145名。10～15回の講座を受講するコースが多いが、専門就農課程（60歳以下）は75回と多い。定年退職後に農業を始める人も少なくないそうだ。

また、小中学生を対象に農作物の収穫作業やうどん打ちなどの食品加工を体験できる講座を開催している。幼稚園・保育園児を対象としたサトイモの植え付け・管理・収穫体験も盛況とのこと。

取材を終えて

学生たちの表情が明るいことが印象に残った取材だった。農業を巡る課題は様々あり、若者にとって魅力に満ちた世界とは言い難い。しかし、校長先生も感じていた通り、若者自身が農業に対して収入にとどまらない魅力を感じて農林大に集っていることは私たちも感じることができた。大震災後の放射能汚染の

問題も含め、今後、私たちはさらに多くの課題に遭遇することと思うが、若者のひたむきな姿勢に農業の未来を託したい。

入試事務等、多忙な中で快く取材に応じてくださった農林大のみなさまに心よりお礼を申し上げるとともに、今後も学生を心から支える支援をお願いしたい。

長時間、広い校内で多様な部門を見学した中で束の間の対面だった肉牛たちの姿が忘れられない。いずれ食べられる命。私たちは他の動植物の命を食べ自分の体をつなぐ。人間と自然とを切り離すことは出来ず、全てはつながっている。その意味や重みをも受け止めながら日々の恵みをいただこうと思う。農業は自然と対話し生命を支える尊い営みであり、その世界へ歩もうとする

若者たちの背中が頼もしく
感じられた。 長谷川陽子



【文責・撮影：倉林順一・下田由佳・長谷川陽子】

群馬県立農林大学校

〒370-3105

群馬県高崎市箕郷町西明屋 1005 番地

TEL：027-371-3244（代表）

メール：nourinkou@pref.gunma.jp

HP：http://www.gunma-iaf.ac.jp

